

1. 巻頭言



総合情報処理センターへ向けて

情報処理センター長

山田 英二

念願であった情報処理センターの省令化が、いよいよ実現しそうである。思えば昭和54年度に予算施設として情報処理センターが発足し、翌55年の運営委員会で省令化を目指す様にと決議されてから、本当に長い道のりであった。

この間、歴代の学長・局長の暖かい御理解に恵まれて、教職員を先取りして配置していただくと共に、予算も優先的に処置していただけたので、来るべき総合情報処理センターのあり方についての十分なる研究と、種々の試行を繰り返すことが出来た。教養部での情報処理Ⅰ、Ⅱの開講、センター施設の情報処理教育への開放、教務事務の電算化、図書館業務電算化の支援、各部局事務室への端末機の設置、ファックスやテレックスサービス等々数えあげるときりがないが、長崎大学に所属する全ての教職員や学生に役立ち、そして自由に使えるセンターにする為の貴重なデータが得られたと思っている。その上、センター所属教官を文部省の長期在外研究員として派遣していただくことも出来たので、外国の大学の計算機センターについても十分調査している。

情報処理センターが設置された昭和54年は、高度情報化社会という言葉が夢物語的に使われはじめた頃で、大型計算機センターでもまだカード入力主流を占めていた。それにもかかわらず、レンタル予算で出来るだけコンピュータシステムの骨格を大きくし、端末機は学内予算で処置して、会話型を指向したセンターを作ったが、この思想は今日まで妥当なものであったと思う。しかし設立以来8年、高度情報化社会という言葉がすっかり定着した現在、大学のコンピュータをとりまく環境も大幅に変って来ている様である。大学のコンピュータも、当然今までは違った思想を持つべきで、丁度良い時機に発展する好機を得たと感謝している。

昨日、各部局の御要望を取り入れ、そして今までセンターで研究して来た成果も加味した総合情報処理センター構想案を作り上げたところである。勿論これには将来を見透した長崎大学独特の構想も含ませている。正式に政府予算案に計上されれば、1月の運営委員会で御審議願ひ、より良いものにしたいと考えている。

総合情報処理センターは、長崎大学に所属するすべての人々が、必要な時に、自由に使えるセンターとなることを強く願っている。順調に行けば、昭和64年1月には新しいコンピュータシステムが運用を開始する予定である。一度御利用いただき、卒直な御感想をお寄せいただきたいと思う。(昭和62年12月22日記)